

広島平和記念資料館企画展

海外収集資料から見る 広島原爆被害と復興



中島方面から東を望む 1945年(昭和20年)10月頃
米軍撮影 ジョン・ピーターソン夫人寄贈 米海軍歴史遺産部所蔵 2016年度(平成28年度)収集

はじめに

広島平和記念資料館では、これまで被爆資料や遺品や写真など被爆に関するさまざまな資料を収集し、調査のうえ整理・保管し、展示や証言を通して被爆の実相を広く伝えてきました。

写真資料は、原爆による被害を知るうえで重要な意味を持っています。これまでも広島原爆に関する多数の写真が知られていますが、原爆投下後に多くの外国人が広島に入ったこともあり、日本では知られていない写真資料が海外にも多数存在しているものと考えられています。

近年資料館では2011年(平成23年)から2012年(平成24年)にかけて米国立公文書館から写真資料のデータを入手したほか、2013年(平成25年)・2016年(平成28年)・2017年(平成29年)・2019年(令和元年)には米国・英国・ニュージーランドに職員を派遣し、各機関や個人が所蔵する写真資料等を収集してきました。

写真だけでなく、被爆に関するあらゆる資料を収集することは、その保管や調査研究、展示・教育と同様に資料館の重要な役割の一つです。被爆75年を迎え、被爆者の高齢化に直面する現在、原爆被害に関わる資料を収集し、確実に整理・保管することの重要性は増しています。

この企画展では、近年海外から収集した写真資料や証言を中心として広島への原爆被害と被爆後の復興を振り返ります。

これにより、世界の各地に原爆被害に関する資料が点在していることや調査の重要性が明らかになるでしょう。この機会に、被爆に関わる資料収集の重要性と被爆の実相に触れていただけたら幸いです。

2019年(令和元年)12月 広島平和記念資料館

2. スティムソン・センター^{きどう}寄贈大型写真

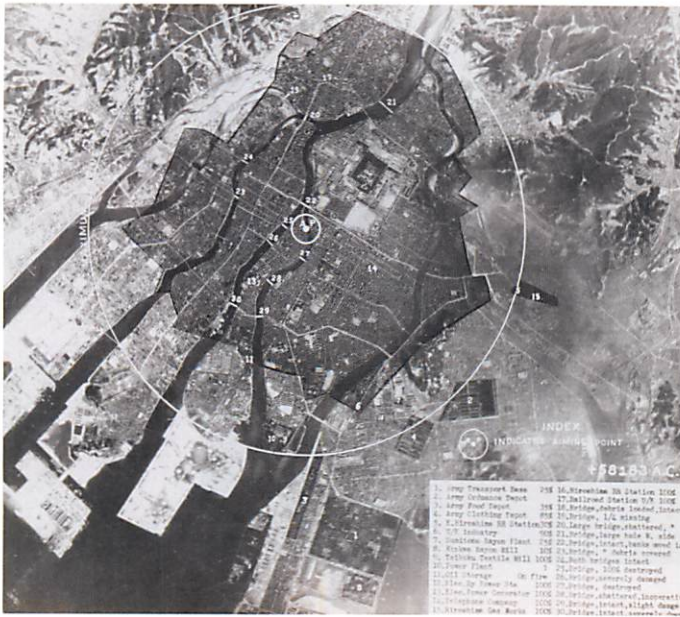
これらは米国の研究機関「スティムソン・センター」から当館に寄贈を受けた大型写真で、同機関の名称は原爆投下時の陸軍長官ヘンリー・スティムソンに由来する。

写真はここに掲載したものを含め全21枚あり、広島・長崎への原爆投下後にトルーマン大統領^{だいとうりょう}やスティムソン陸軍長官へのブリーフィングに使用されたものであるとされている。

このページの航空写真は広島市立大学・橋本健佑氏が撮影した高解像度データを使用しました。



寄贈された写真が入る箱



2-1. 原爆投下前に撮影された航空写真

米軍撮影 スティムソン・センター寄贈 当館蔵 2016年(平成28年)寄贈

原爆投下以前の1945年(昭和20年)3月28日に撮影された航空写真をもとに、軍事施設などの情報が書き入れられたもの。元安橋付近に投下目標の印がある。



2-2. 原爆投下翌日に撮影された航空写真

米軍撮影 スティムソン・センター寄贈 当館蔵 2016年(平成28年)寄贈

原爆投下翌日の1945年(昭和20年)8月7日に撮影された航空写真。家屋が広範囲に焼失していることがわかる。



2-3,2-4. 原爆投下翌日に撮影された航空写真

米軍撮影 スティムソン・センター寄贈 当館蔵 2016年(平成28年)寄贈

原爆投下翌日の1945年(昭和20年)8月7日に撮影された広島市地域南北の航空写真。爆心地から離れた地域では家屋が残存していることがわかる。

3. 原爆投下

1945年(昭和20年)8月6日8時15分、テニアン島から飛来した爆撃機B-29 エノラ・ゲイが広島に原子爆弾を投下した。広島が壊滅的な被害を受け、地上では人々が苦しんで亡くなり、あるいは郊外へと逃げ、必死の救援・救護活動が行われるなか、米軍は損害評価のため投下当日から航空機での写真撮影を行っていた。



3-1. エノラ・ゲイから撮影されたきのこ雲

1945年(昭和20年)8月6日 米軍撮影 米議会図書館所蔵 2016年(平成28年)収集

広島への原爆投下直後のきのこ雲。エノラ・ゲイから撮影されたものと考えられる。当館による調査以前には知られていなかったもの。

同機から撮影されたきのこ雲の写真はこれ以前では2点が知られていた。



3-2. 原爆投下当日に撮影された航空写真

1945年(昭和20年)8月6日 米軍撮影
米国立公文書館所蔵 2013年度(平成15年度)収集

広島への原爆投下後、米軍の写真偵察機が12時25分頃広島上空に到達して写真を撮影した。この写真では比治山付近から宇品地域までは視認できるが、中心部方面は煙で覆われている。

4. 終戦後に^{さつえい}撮影された航空写真

日本が無条件降伏を受け入れ、9月2日に降伏文書に調印すると、連合国軍の日本本土への進駐が開始された。

近年の資料収集では、進駐以降に航空機から広島^{ひがし}の被害を撮影した写真を数多く収集することができた。

戦時中は高高度からの垂直撮影が主であったのに対し、降伏後では低空から撮影されたものも多く見られ、原爆による被害状況を詳細に読み取ることができる。



4-1. 舟入・吉島・千田地区を西から望む

1945年（昭和20年）9月8日 米軍撮影 ヴィクター・ブレンクル寄贈
米国立空軍博物館所蔵 2016年（平成28年）収集

舟入・吉島・千田地区を西側から低空で撮影したもの。画面左奥が爆心地であるため、左側（北）よりも右側（南）の被害が少ないことがわかる。



4-2. 広島城・白島周辺

1945年（昭和20年）9月8日 米軍撮影 ヴィクター・ブレンクル寄贈
米国立空軍博物館所蔵 2016年（平成28年）収集

基町・白島地区を北側から低空で撮影したもの。画面右上には陸軍の中国軍管区司令部として使用されていた広島城が写り、郭内に崩壊した建物が散乱するのが見える。



4-3. 広島駅周辺

1945年（昭和20年）9月8日 米軍撮影 ヴィクター・ブレンクル寄贈
米国立空軍博物館所蔵 2016年（平成28年）収集

広島駅周辺を北側から低空で撮影したもの。画面左上（東側）の方面は被害が小さいことがわかる。9月8日撮影のため、17日の枕崎台風で流出した大正橋が架かっている。

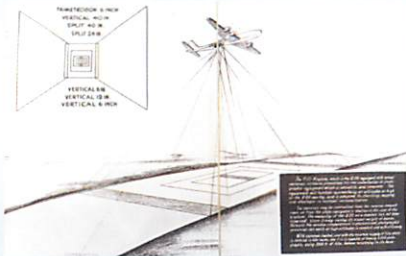


4-4. 比治山付近から西を望む

1945年（昭和20年）9月8日 米軍撮影 ヴィクター・ブレンクル寄贈
米国立空軍博物館所蔵 2016年（平成28年）収集

比治山付近の上空から西方を低空で撮影したもの。画面中央を縦に貫くのは現在の平和大通りで、被爆前に建物疎開が行われた道の両側部分が白っぽく見える。

米軍が撮影した航空写真



F-13 に搭載されたカメラの撮影範囲
米国立空軍博物館所蔵

戦場で空中から敵情を偵察することは、18世紀末のフランスで気球を使用して行われたのが最初期であるという。20世紀に入り航

空機が発明されると、第1次世界大戦から本格的に軍事目的に利用され、偵察目的にも多用されていった。

マリアナ諸島を拠点としたB-29によるアメリカ軍の日本本土空襲は、1944年（昭和19年）11月24日に始まり、1945年（昭和20年）8月まで続く。マリアナから給油なしで日本本土往復が可能であったのはB-29だけであったため、同機が写真偵察用に改造された。

写真偵察用のB-29はF-13と名付けられ、日本への空襲に際し、事前の情報収集のための撮影を行い、空襲後にも損害確認のために撮影している。1944年11月1日に東京上空で撮影を行ったのを初回として、その撮影作戦数は翌1945年8月15日までに460回にも及ぶ。F-13には通常3種類、合計6台のカメラが装備されており、撮影された写真から詳細な地図を作成することが可能であった。

先にも触れたように、日本の降伏後に低空から撮影された写真も多数見受けられる。これらの写真は、カメラを手に持って航空機の窓やドアから撮影されたようである。



撮影のためF-13機体底面に設けられたガラス窓
米軍撮影 米国立空軍博物館所蔵



4-5. 吉島地域付近から北を望む

1945年（昭和20年）10月頃 米軍撮影 ジョン・ピーターソン夫人寄贈
米海軍歴史遺産部所蔵 2016年（平成28年）収集

吉島方面から北を低空で撮影したもの。画面上方の爆心地に近づくほど被害が大きいことがわかる。画面下方の白く見える部分は、戦時中に新たに埋め立てられ1940年頃から使用されていた陸軍吉島飛行場。航空機が駐機しているのが見える。



4-6. 中島方面から東を望む

1945年（昭和20年）10月頃 米軍撮影 ジョン・ピーターソン夫人寄贈
米海軍歴史遺産部所蔵 2016年（平成28年）収集

中島方面から東側を低空で撮影したもの。原爆投下の目標となったT字型の相生橋上流（左）側に流木が溜まっている。9月17日の枕崎台風で発生し流れ着いたものと思われる。



4-7. 基町方面から南を望む

1945年（昭和20年）10月頃 米軍撮影 ジョン・ピーターソン夫人寄贈
米海軍歴史遺産部所蔵 2016年（平成28年）収集

基町方面から南側を低空で撮影したもの。似島、江田島、能美島が見える。似島には当時陸軍の検疫所が置かれ医療設備があり、負傷者の臨時収容施設となった。



4-8. 広島駅付近から南西を望む

1945年（昭和20年）10月頃 米軍撮影 ジョン・ピーターソン夫人寄贈
米海軍歴史遺産部所蔵 2016年（平成28年）収集

広島駅付近から南西方面を低空で撮影したもの。中心部とともに南観音、草津、五日市方面まで写る。



4-9. 広島市街地を北側から望む

1946年(昭和21年)1月頃 ウィリアム・ジョーンズ撮影・寄贈
米国立空軍博物館所蔵 2016年(平成28年)収集

山陽本線の線路付近上空から市街地を南向きに撮影したもの。爆心地からの距離や地形による被害の相違が広範囲で確認できる。

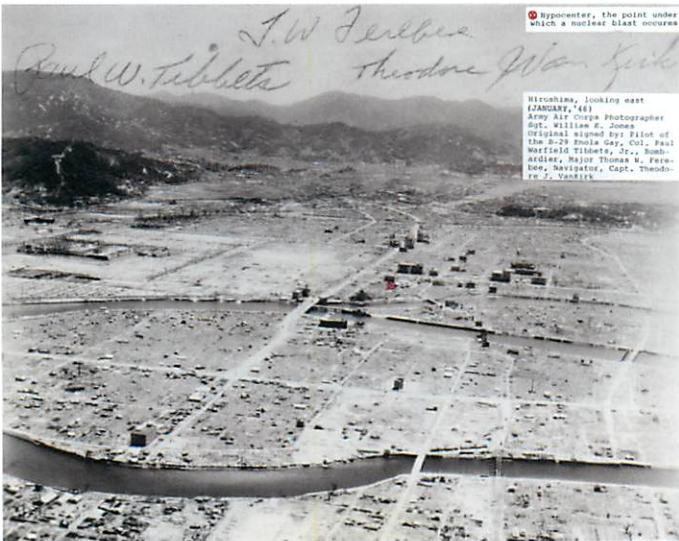
「真宗学寮」の被爆建物台帳への登録



被爆後の真宗学寮講堂と寮舎 1945年(昭和20年)10月頃
米軍撮影 ジョン・ピーターソン夫人寄贈

2019年(令和元年)10月31日、広島市は「真宗学寮」の建物を新たに被爆建物台帳に登録した。この台帳は爆心地から5km以内に現存する被爆時に存在した建物を登録するもので、登録件数は86件となった。真宗学寮は浄土真宗を学ぶことができる私塾で、1906年(明治39年)に細工町(現、中区大手町)西向寺内に設けられ、1926年(大正15年)に南観音町(現、西区南観音)に建物を新築移転した。被爆直後には多くの被災した人々が集まる臨時救護所となり、その後も同じ建物が使用され続けていたものの、同台帳には登録されていなかったことが国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の被爆者証言ビデオを制作する過程で明らかになった。

登録にあたっては、広島平和記念資料館が2016年(平成28年)に米国で収集した、終戦後に撮影された航空写真が参照された。6ページの「広島駅付近から南西を望む」の該当箇所を拡大すると、真宗学寮の講堂と寮舎が確認できる。



4-10. 天満町付近から東を望む

1946年(昭和21年)1月頃 ウィリアム・ジョーンズ撮影・寄贈
米国立空軍博物館所蔵 2016年(平成28年)収集

天満町付近から東側に向けて市街地中心部を撮影したもの。画面東側中頃には既に住宅が建設されているのが見える。写真上部にはエノラ・ゲイの機長ポール・ティベッツ、爆撃手トーマス・フィアビー、航法士セオドア・バンカークのサインが書かれている。これは後年にサインをもらったものだという。爆心地の赤い印や貼付されたコメントは寄贈者によるもの。



4-11. 広島市街地を南側から望む

1946年(昭和21年)1月頃 ウィリアム・ジョーンズ撮影・寄贈
米国立空軍博物館所蔵 2016年(平成28年)収集

天満川河口付近から北方を望む。爆心地を中心として被害のあった地域が白く見える。

被爆後の広島を上空から撮影した ウィリアム・ジョーンズ氏



資料館職員の聞き取りに応じるジョーンズ氏
2017年(平成29年)9月29日 米国インディアナ州

米国立空軍博物館(1942年より航空軍に統合、47年より空軍)のカメラマンであった

ウィリアム・ジョーンズ氏は、広島で撮影した航空写真や関係資料を航空宇宙博物館や国立空軍博物館などに寄贈している。

ジョーンズ氏は、陸軍第5空軍の航空写真カメラマンとして、偵察撮影などの任務にあたっていた。1945年(昭和20年)12月末、福岡の飛行場(現、福岡空港)に配置されていた時に広島上空撮影の命令を受けたという。1月に広島上空で撮影を行い、その後長崎でも撮影を行った。

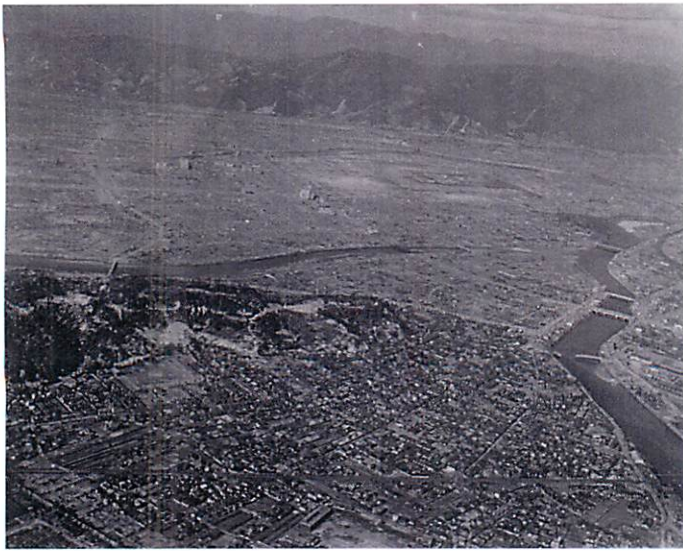
ジョーンズ氏は、広島を見た際の印象をこう語っている。

——私は被害を撮影しただけで原爆投下には関わっていない。私が被害を見た際、それは壊滅的なものだった。[中略]ここでの数々の死について知ったとき、私は

とても悲しくなった。私は広島・長崎への原爆投下を誇りに思わない、それが戦争を終わらせたのだとしても。

——私は見たくないものを見た。見たくないたくさんのものを見た。人間への、人間に対する非人道的な行いも。[中略]私は日本人を同胞と同じように愛せることができた。そこで思った「なぜ?なぜ戦争が?なぜ?」と。私にはわからなかった。その時、私は泣き叫んだ。人間の非人道的な行いを見て、何度も泣き叫んだ。

ジョーンズ氏は、自身が撮影した写真を使用し、この経験について学校、州議会議員、空軍軍人などに対して600回以上も講演を行ったという。



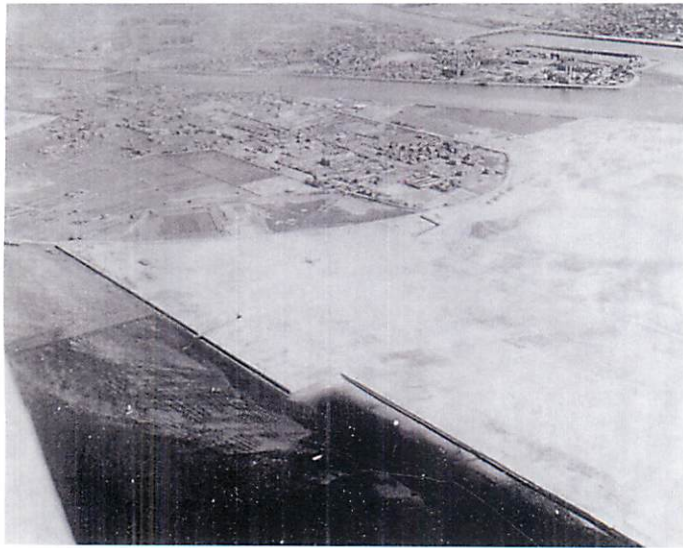
4-12. 基町方面から南を望む

1946年（昭和21年）2月頃 米軍撮影 米国立航空宇宙博物館 2019年（令和元年）収集
基町付近から爆心地を含む市街地を撮影した航空写真。



4-13. 吉島飛行場付近

1946年（昭和21年）2月頃 米軍撮影 米国立航空宇宙博物館 2019年（令和元年）収集
埋め立てによって建設された吉島飛行場。現在は市街地となっている。



4-14. 吉島飛行場付近

1946年（昭和21年）2月頃 米軍撮影 米国立航空宇宙博物館 2019年（令和元年）収集
埋め立てによって建設された吉島飛行場。現在は市街地となっている。



4-15. 舟入地域付近から北を望む

1945年（昭和20年）秋以降 ロナルド・ヴィンゴ撮影
マッカーサー記念館所蔵 2017年（平成29年）収集
舟入付近から横川駅を含む北方を撮影した航空写真。現在の平和大通りとなった付近では被爆前に建物疎開が行われた地域が白っぽく見えている。



4-16. 比治山付近から西を望む

1945年（昭和20年）秋以降 ロナルド・ヴィンゴ撮影
マッカーサー記念館所蔵 2017年（平成29年）収集

比治山付近の上空から広島市の市街地を西方に撮影した航空写真。広島城の西側の本川河畔に住宅が建てられているのが見える。



4-17. 上空から見た小田政商店の焼け跡

1945年（昭和20年）秋以降 米軍撮影 ロバート・ノーラン資料
米海兵隊歴史部所蔵 2017年（平成28年）収集

北西から見下ろした小田政商店の鉄骨。爆風で歪み、高熱火災で変形している。画面左奥に見えるのはキリンビヤホール。

はいきよ 5. 廃虚の広島

占領軍の兵士たちは、進駐後の早い時期から広島を訪問しており、その際に撮影された写真が多く残されている。明確に軍務として撮影を行ったことがわかる例もあれば、個人的に撮影したものも見られる。彼らは廃虚の広島で何を思ったのだろうか。



5-1. 爆風で倒壊した木造の建物

1945年（昭和20年）11月頃 英国立公文書館所蔵 2019年（令和元年）収集

倒壊した建物は広島県立広島商業学校の校舎と思われる。同校は1944年（昭和19年）に江波町から皆実町へ移転し旧県立広島師範学校の校舎を使用しており、教職員・生徒たちが負傷した。東北東を望み、奥に比治山が見える。



5-2. 京橋町の焼け跡で

1945年（昭和20年）11月頃 英国立公文書館所蔵 2019年（令和元年）収集

焼け跡の中、台の上には鍋のようなものが置かれている。北東を望み、奥に広島駅の駅舎が見える。



5-3. 中島本町から北北西を望む

1945年（昭和20年）11月頃 英国立公文書館所蔵 2019年（令和元年）収集

原爆投下の目標となったT字型の相生橋が、爆風を受け欄干が崩れ落ちてい。手前は現在の平和記念公園の北端で当時は慈仙寺鼻と呼ばれた。川に沿って旅館が何軒も建ち並び、焼け跡にバラックを建てている様子も写る。



5-4. 下村時計店

1945年（昭和20年）11月頃 英国立公文書館所蔵 2019年（令和元年）収集

建物の後ろ側から撮影し、北北東を望む。奥に福屋百貨店が見える。鉄筋コンクリート造の建物は1階部分が崩れ、2階と時計台が残った。



5-5. 広島流川教会

1945年（昭和20年）10月頃 米海軍歴史遺産部所蔵 2016年（平成28年）収集

広島流川教会前に寄贈者が立っている。同教会は1927年（昭和2年）に竣工、戦時中の1943年（昭和18年）からは建物の一部が軍服製造工場として使われていた。礼拝堂はコンクリート造のため空襲の際の臨時避難所にも指定されていたが、被爆後に残ったのは塔と外壁のみであった。



5-6. 焼け跡で言葉を交わす広島市民とインド人兵士

1945年（昭和20年）11月頃 英国立公文書館所蔵 2019年（令和元年）収集

多く商店が建ち並び賑わっていた本通りの焼け跡。インド人兵士は英連邦の軍の一員として広島へ進駐した。北西方向を望み、中央奥にバラックが見える。



5-7. 西練兵場を望む

1945年(昭和20年)9月 米国立公文書館所蔵 2009年(平成21年)収集

西練兵場(現在の基町付近)の南東角付近から北東を撮影したもの。この練兵場では演習中に被爆した兵士の遺体やひどい火傷を負った人たちが横たわり、苦しむ人たちのうめき声が響いた。



5-8. 幟町から北西を望む

1945年(昭和20年)9月 米国立公文書館所蔵 2009年(平成21年)収集

幟町の電車通り沿いから撮影したもの。画面中央の樹木は爆風の影響を受けたのか傾いている。画面右の壁は幟町国民学校のもので、奥に広島流川教会が見える。



5-9. 身を横たえる人々

1945年(昭和20年)9月 米国立公文書館所蔵 2009年(平成21年)収集

救護所内の光景。中央に母親と子どもが身を横たえている。



ウェイン・ミラー氏が広島収集したガラスが付着した猪口
ジャネット・ミラー寄贈 当館蔵

米国の著名な写真家ウェイン・ミラー氏 [1918-2013] は、1942年から1946年までの間、米海軍のカメラマンとして従事していた。広島に原爆が投下されると翌9月に広島に入り救護所内の写真などを撮影した。ミラー氏はこの時に広島で溶けた陶器などを拾い、本国に持ち帰り保管していた。



5-10. 救護所となった本川国民学校内部

1945年(昭和20年)8月頃 川本俊雄撮影(推定)
米科学アカデミー所蔵 2017年(平成29年)収集

救護所となった本川国民学校の内部で撮影された写真。当館の調査以前には知られていなかったもの。当時米側が収集した写真群の中に含まれていた。



5-11. 英語の看板に掛け替えられた広島市役所

1945年(昭和20年)秋頃 米海兵隊歴史部所蔵
F・クレイ・ニクソン撮影・寄贈 2017年(平成29年)収集

広島市役所庁舎。「広島市庁」の文字を覆い隠すように「HIROSHIMA CITY HALL」の看板が張り付けられている。



5-12. 広島瓦斯広島工場付近の焼け跡に立つ少女

1945年(昭和20年)秋頃 米海兵隊歴史部所蔵
F・クレイ・ニクソン撮影・寄贈 2017年(平成29年)収集

焼け跡の瓦礫の中に少女が立っている。背後には工場の煙突が見える。



5-13. 広島流川教会と自動車の残骸

1945年(昭和20年)秋頃 米海兵隊歴史部所蔵
F・クレイ・ニクソン撮影・寄贈 2017年(平成29年)収集

南西から見た広島流川教会。焼け焦げた自動車と教会の間に幼子を背負って歩く人に見える。

6. 爆心地

被爆後の広島には、進駐軍の兵士や占領統治にかかわる職員などを含め、多くの外国人が訪れた。彼らの多くは爆心地へと向かった。爆心地には看板が掲げられ、付近では原爆で変形したびんや瓦などを売る土産物屋も開設されていた。



6-1. 爆心地での記念撮影

1948年(昭和23年)12月30日 ローレンス・ヒューズ・ジュニア資料
マッカーサー記念館所蔵 2017年(平成21年)収集

GHQ職員だったアメリカ人ヒューズ氏が個人的に広島を訪れた際に撮影したもの。鉄塔に「CENTER OF IMPACT」と書かれた看板が見える。



6-2. 爆心地付近

1948年(昭和23年)12月30日 ローレンス・ヒューズ・ジュニア資料
マッカーサー記念館所蔵 2017年(平成21年)収集

ヒューズ氏が撮影した爆心地付近。この写真が貼られたアルバムには、「爆心地付近の驚くべき再建を示している」とある。



6-3. 爆心地での記念撮影

1947年(昭和22年)12月～1948年前半頃
アレクサンダー・ターンブル因館所蔵 2017年(平成21年)収集

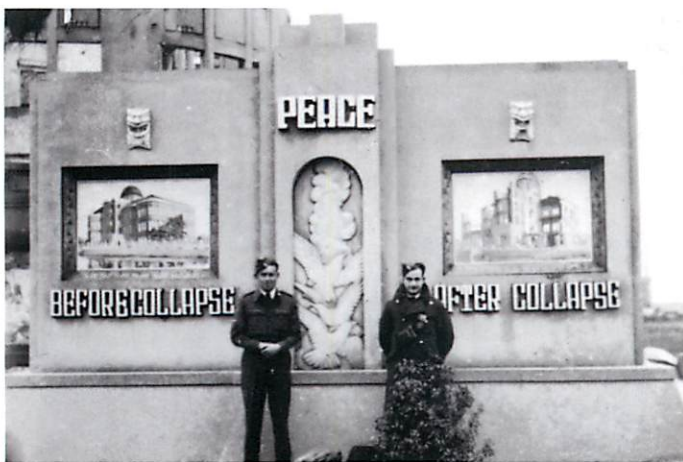
ニュージーランド軍の兵士が爆心地の看板の前で撮影したもの。中国・四国の占領は連合国軍のうちイギリスを始めとした英連邦軍が主に担当した。



6-4. 爆心地付近

1947年(昭和22年)1～2月 ジョージ・バージェス撮影
マッカーサー記念館所蔵 2017年(平成21年)収集

日本の賠償に関する調査をしたOCI(海外コンサルタント会社)が広島を訪れた際、その一員であったバージェス氏が撮影したもの。



6-5. 原爆ドーム北側のモニュメント

1947年(昭和22年)12月～1948年(昭和22年)前半頃
アレクサンダー・ターンブル因館所蔵 2017年(平成21年)収集

原爆ドーム前に作られたモニュメントの前で記念撮影をするニュージーランド軍兵士たち。このモニュメントは「平和記念塔」と呼ばれたもの。1947年(昭和22年)に昭和天皇が広島を訪れた際に作られ、1955年(昭和30年)頃まで存在した。



6-6. 「原爆一号」吉川清さんの店

1951年(昭和26年)以降 マッカーサー記念館所蔵 2017年(平成21年)収集

米国の雑誌で「Atomic Bomb Victim No.1」(「原爆一号」)と紹介された吉川清さんは、爆心地付近で土産物屋を開いていた。原爆により背中に大やけどを負った吉川さんは、客の求めに応じてケロイドの残る背中を見せることもあった。

7. 復興

原爆投下で大きな被害を受けた広島は、その直後から復興へ向けた努力を始めていた。

ここでは、収集した資料の中から、被爆1年後・2年後・3年後の写真や、占領統治のひとこま、そして広島平和記念資料館建設の様子を紹介する。



7-1. 被爆1年後の相生橋

1946年（昭和21年）8月5日～7日 川本俊雄撮影
米国科学アカデミー所蔵 2017年（平成21年）収集

橋の下に被爆による残骸が残っている一方で、普段着の人々が行き交う。



7-2. 被爆1年後の原爆ドーム

1946年（昭和21年）8月5日～7日 川本俊雄撮影
米国科学アカデミー所蔵 2017年（平成21年）収集

原爆ドーム周辺もある程度片付けられ、付近に木造の建物が建てられているのが見える。



7-3. 被爆1年後の広島護国神社跡

1946年（昭和21年）8月5日～7日 川本俊雄撮影
米国科学アカデミー所蔵 2017年（平成21年）収集

被爆一年後に行われた盆踊り大会のため、広島護国神社跡に人々が集まっている。画面右側に櫓の上に置かれた太鼓が見える。



7-4. 第1回平和祭での平和宣言

1947年（昭和22年）8月6日 米軍撮影 米陸軍遺産教育センター所蔵
2019年（令和元年）収集

慈仙寺鼻を「平和広場」として行われた第1回広島平和祭において平和宣言を行う浜井信三市長。この平和祭では連合国軍最高司令官ダグラス・マッカーサー元帥によるメッセージが代読された。



7-5. 第1回平和祭での平和の歌演奏・合唱

1947年（昭和22年）8月6日 米軍撮影 米陸軍遺産教育センター所蔵
2019年（令和元年）収集

第1回平和祭での平和の歌演奏・合唱。



7-6. 第1回平和祭での平和の歌演奏・合唱

1947年（昭和22年）8月6日 米軍撮影 米陸軍遺産教育センター所蔵
2019年（令和元年）収集

第1回平和祭での平和の歌演奏・合唱。



7-7. 第1回平和祭での「平和踊」

1947年(昭和22年)8月6日 米軍撮影 米陸軍遺産教育センター所蔵
2019年(令和元年)収集

第1回平和祭の一部として行われたもの。



7-8. 第2回平和祭

1948年(昭和23年)8月6日 アレクサンダー・ターンプル図書館所蔵
2017年(平成29年)収集

慈仙鼻で開催された第2回平和祭。壇上には英連邦軍司令官のロバートソン中将が見える。



7-9. 「安全週間」—市内電車の安全第一サイン

1947年(昭和22年)6月9日~15日 アレクサンダー・ターンプル図書館所蔵
2017年(平成29年)収集

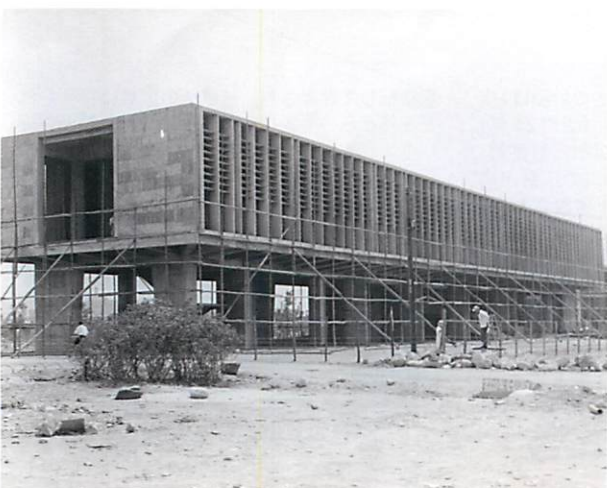
増加する交通事故に対応して占領軍の指導で行われた「安全週間」の様子。八丁堀に停車している市内電車で日英で「安全第一」と書かれているが英字の綴は誤っている。



7-10. 「安全週間」—啓発ビラの空からの配布

1947年(昭和22年)6月9日~15日 アレクサンダー・ターンプル図書館所蔵
2017年(平成29年)収集

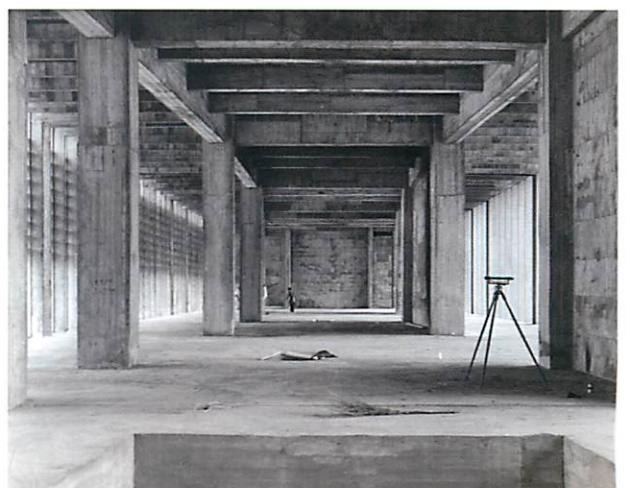
英連邦軍の航空機が交通安全を訴えるビラを散布している。当時八丁堀にあった中国新聞ビルから撮影された。



7-11. 建設中の広島平和記念資料館(外観)

1951年(昭和26年)~1955年(昭和30)頃 米科学アカデミー所蔵
2017年(平成29年)収集

建設中の広島平和記念資料館を南西から撮影したもの。



7-12. 建設中の広島平和記念資料館(内観)

1951年(昭和26年)~1955年(昭和30)頃 米科学アカデミー所蔵
2017年(平成29年)収集

建設中の広島平和記念資料館を内部で撮影したもの。東側から西側を見る。

8. 海外からの支援——「広島の家」計画

被爆後の広島に対しては、海外からも多くの支援の手が差し伸べられた。

その中の一つが、米国シアトルに住むフロイド・シュモール氏たちが行った「広島の家」計画であった。

この計画は、原爆によって家を失った人々のために家を建設するもので、1949年(昭和24年)から1953年(昭和28年)までの活動の中で、15棟21戸の建物が建設された。ここでは、広島市内江波皿山ふもとでの建設を紹介する。



8-1. 建設現場に掲げられたスローガン

1951年(昭和26年) 富子・シュモール寄贈 シュモールに学ぶ会寄託 2017年(平成29年) 取集
江波皿山の建設現場に掲げられていたスローガン。「広島ワークキャンププロジェクト/1. お互いを理解しあい/2. 家を建てることによって/3. 平和が訪れますように」とある。



8-2. 「WORK CAMP」の文字を書き入れる

1951年(昭和26年) ジーン・ウォーキンショー提供 2019年(令和元年) 取集
江波皿山の建設現場で階段を作った際に書き込まれた「WORK CAMP」の文字。



8-3. ともに家を建てた仲間たち

1951年(昭和26年) ジーン・ウォーキンショー提供 2019年(令和元年) 高解像度版取集
米国から建設にやってきたジーン・ストロングさんと東京の北川正博さん。北川さんは広島に到着してジーンさんが駅まで迎えに来た際に戦争が終わったと実感し、感慨した。



8-4. 江波皿山から見下ろした「シュモール住宅」

1952年(昭和27年)頃 富子・シュモール寄贈 シュモールに学ぶ会寄託 2017年(平成29年) 取集
完成した住宅を皿山から見下ろす。現在ではこれらの建物のうちの1棟が保存され、資料館の附属展示施設「シュモールハウス」となっている。

広島平和記念資料館 附属展示施設シュモールハウス



フロイド・シュモール氏 [1895-2001]
ブルックス・アンドリュース寄贈
1949年(昭和24年)8月～9月 皆実町の建設現場で
米国のフロイド・シュモール氏は、1945年(昭和20年)8月に広島・長崎に原爆が投下されると心を痛め、家を失った人々のために皆で

住宅を建設する計画を立てた。この計画は「広島の家」と名付けられ、1949年(昭和24年)から1953年(昭和28年)までの間に、皆実町、江波皿山ふもと、江波町、牛田町の広島市内各地に合計15棟21戸の建物が建設された。また、長崎にも同様に住宅や集会所が建設された。

これらのうち、唯一現在でも建物が残っているのが江波皿山ふもとに集会所として建てられたものである。

この建物は、広島南道路の整備に伴い、2012年(平成24年)、北西に約40メートル曳



皆実町の建設現場
1949年(昭和24年)8月～9月
北澤純子寄贈
シュモールに学ぶ会寄託

家移転して保存され、被爆後の広島に寄せられた海外からの支援を伝える展示施設「シュモールハウス」となり、同年11月に開館した。

開館後、多くの関係者から関係資料が寄贈され、2019年(平成31年)2月には常設展示のうち「広島の家」に関する部分のリニューアルが行われた。



広島平和記念資料館附属展示施設シュモールハウス

近年の海外資料収集の概要

広島平和記念資料館では、古くは、1974年(昭和49年)に長崎市と共同で渡米調査を行って以来、特に米国国立公文書館が所蔵する写真資料を中心に調査を行ってきた。

近年では、2009年度(平成21年度)から2012年度(平成24年度)にかけては、データを取り寄せる形で米国戦略爆撃調査団が撮影した写真などを収集した。



調査を行う資料が入った保存箱
2019年(令和元年)10月 米陸軍遺産教育センター



米国立空軍博物館での調査 2016年(平成28年)12月

2013年(平成25年)には資料館職員を現地に派遣し、米国国立公文書館での資料調査を行い、写真資料を収集した。

2016年(平成28年)以降は米国では国立公文書館以外の資料所蔵機関にも手を広げ、合計13の機関での資料収集を行った。関係する個人にも聞き取りを行い、資料を入手した例もある。

2017年(平成29年)にはニュージーランド、2019年(令和元年)には英国の機関でも調査・収集を行った。

海外の各機関での調査にあたっては、各機

関がインターネット上で公開している所蔵資料の目録情報を参照、あるいはE-mail等での問合せも行い、実際に訪問する必要があるか絞り込んでいく。

所蔵する資料は、官公庁・軍が作成して機関に移管された公文書や、軍人が個人的に撮影した写真や手記などが寄贈したものなど、多様な性質を持ったものがある。

収集した写真資料は、整理・検証のうえ、権利上可能なものは当館がインターネット上に開設する「平和データベース」で公開している。



平和データベース

<http://www.pcf.city.hiroshima.jp/database>

長崎の被害を撮影した写真資料

各資料所蔵機関には、広島以外にも以下のように長崎の原爆被害を撮影した写真も数多く含まれている。



低空から撮影された被爆後の長崎市街地——爆心地を南から望む
1946年(昭和21年)1月 ウィリアム・ジョーンズ氏撮影・寄贈
米国立空軍博物館所蔵



三菱製鋼所付近
1945年(昭和20年)
9月17日～19日
フレデリック・マーヴィル氏撮影
エミリー・マーヴィル氏寄贈
米海軍歴史遺産部所蔵



低空から撮影された
被爆後の長崎市街地
——南を望む
1945年(昭和20年)9月頃
トーマス・ボロック氏寄贈
米海軍歴史遺産部所蔵

写真資料の「新発見」まで

各国の資料所蔵機関には、膨大な数の写真が保管されている。媒体は紙焼き写真、ネガフィルム、ポジフィルムなどさまざまである。それらをカメラでの接写、またはスキャナで読み取るなどの方法で収集していく。

広島の前爆被害に関する写真は数多く所蔵されているが、これまで知られているものと同じ写真である場合も多く、未発見の写真であると判断するには既知の情報との照合作業が必要となる。

各所蔵機関とも多様な組織・個人から資料を受け入れていることもあり、それぞれの資料の性質や、残された情報の多寡は一様ではない。今回調査を行った各機関でも専門職員が整理作業にあっているが、必ずしも1枚ごとの撮影場所、撮影年月日、撮影者などの情報が判明しているとは限らない。



会見を行う原爆投下関係者たちを撮影した写真とその裏面
1945年(昭和20)8月7日 米軍撮影 米議会図書館所蔵
裏面に1945年8月5日にグアムで行われたブリーフィングであると書かれているが、同日にこのブリーフィングがあった形跡は文献上見当たらない。他方、原爆投下後の8月7日に行われた記者会見時の酷似した写真があるため、撮影日を同日頃と推定している。

情報が残されていないければ、写真に写る内容からどのような写真であるかを判断する必要がある。この場合、これまで知られている写真や文献などから撮影場所や時期を絞り込んでいく。

あるいは、紙焼き写真の裏面などに写真の説明が書き込まれている場合でも、その情報が正確でない場合もある。写真の性質を理解するためには、写っている内容や書き込みの内容など、既知のものとお合わせ全ての情報を総合的に検討する必要がある。時間を要するが重要な作業である。

まもなく被爆から75年。1枚の写真が、1つの資料群が、そのみで歴史像を覆すような「新発見」は容易には現れない。しかし、これらの写真の持つ意味を1枚ずつ正確に位置付けることで、薄紙を剥ぐように、原爆による被害のあり様をより理解するための一助となっていく。

資料調査と展示にあたり、下記の機関・個人にご協力いただきました。記して感謝いたします。

1. 機関

《米国》

カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校図書館(カリフォルニア州ロサンゼルス)
国立航空宇宙博物館ウドバーハジーセンター(バージニア州シャンティリー)
国立米国歴史博物館(ワシントン DC)
シカゴ大学図書館(イリノイ州シカゴ)
スミソニアン協会アーカイブズ(ワシントン DC)
米国海軍歴史遺産部(ワシントン DC)
米国海兵隊歴史部(バージニア州クワンティコ)
米国科学アカデミー(ワシントン DC)
米国議会図書館(ワシントン DC)
米国国立空軍博物館(オハイオ州デイトン)
米国国立公文書館(メリーランド州カレッジパーク)
米国陸軍遺産教育センター(ペンシルベニア州カーライル)
マッカーサー記念館(バージニア州ノーフォーク)

《英国》

英国国立公文書館(ロンドン)
英国国立陸軍博物館(ロンドン)
英国帝国戦争博物館(ロンドン)

《ニュージーランド》

アレクサンダー・ターンプル図書館(ウェリントン)
オークランド戦争記念博物館(オークランド)

2. 個人

飯田香穂里(総合研究大学院大学)
ジーン・ウォーキンショー
工藤洋三
久保田明子(広島大学)
マイケル・クレボン(スティムソン・センター)
富子・シュモー
ウィリアム・ジョーンズ
西村宏子(シュモーに学ぶ会)
ノーマ・フィールド(シカゴ大学)
ティム・マクガバン
ジャネット・ミラー
吉村亜弥子(シカゴ大学図書館)
ケイリーン・ロイサー

[50 音順、敬称略]

広島平和記念資料館企画展
海外収集資料から見る広島原爆災害と復興

期間 2019年(令和元年)12月27日～2020年(令和2年)7月下旬

会場 広島平和記念資料館 東館1階 企画展示室

発行 広島平和記念資料館学芸課

730-0811 広島市中区中島町1-2